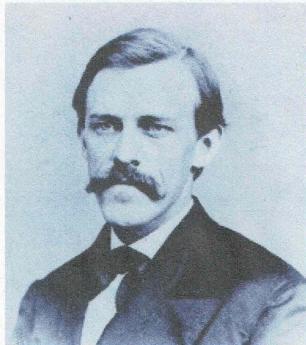


『国籍や血縁が人を結ぶのではなく、心が人と人とを結ぶのだ』

グリフィス
(一八四三～一九二八)は、
日下部太郎の
留学先のラト
ガース大学で
太郎を指導し、
その勉學
態度を見て日
本人の節度、
勤勉さに心を
動かされ、日
本に興味をも
た。『皇國』には福井の思い



ウイリアム・
エリオット・
グリフィス

つようになりました。明治4年(一八七一)、グリフィスは福井藩からの招聘に応じ、藩校「明新館」における理化学の教師として来福し、日本で初めて西洋式の理科実験室を作りました。そこで多くの若者を指導し、石塚左玄、今立吐醉など優秀な人材を育てました。

しかし、廃藩置県という歴史的な国内情勢の変化のため、グリフィスはわずか10か月で福井を離れることになりました。当時、中央政府で活躍していた由利公正の勧めもあり、大学南校(後の東京大

学)教授となります。帰国後、日本の出版をはじめ、日本の紹介と理解に貢献し、日本研究の第一人者と言われました。『皇國』には福井の思い

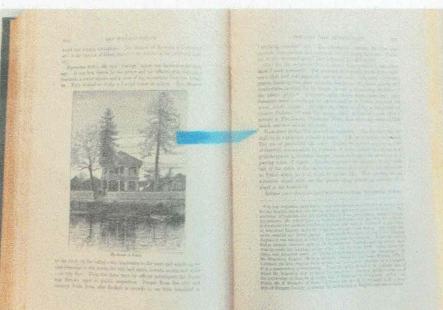
時代の転換期に福井を通して日本を見つめた ウイリアム・エリオット・グリフィス



出も数多く書かれています。



グリフィス・日下部像



『皇國』歴史、地理、民俗、文化等(M9)



米国から取り寄せた実験室の器具



▼今立吐醉(一八五五～一九三一) 鮪江市出身。福井藩校

今立吐醉 いまだ とすい

グリフィスの指導を受けた初代京都府中学校長

八七〇)は、慶應三年(一八六七)福井藩で初めての海外留学生としてアメリカに渡りました。ニューブランズウイツ



日下部太郎

くさかべ
たろう

福井藩最初の海外留学生(福井市出身)

明新館では、グリフィスに出会い指導を受け、成績優秀でその後伴って上京。大学南校(現東京大学)に入学、明治七年グリフィスの帰国に同行してアメリカ・ペンシルベニア大学に留学しました。帰国後は京都府中学理化学教授、弱冠25歳で初代の京都府中学校長に就任しました。

ク市のラトガース大学に入学し、グリフィスらの指導を受け学問の研鑽に励んだ太郎は、広い分野で優秀な成績をおさめました。しかし、卒業を目前にして病気のため26歳の若さで客死し、多くの人々からその死を惜しまれました。大学は太郎に卒業生と同等の資格を与えると共に、彼を同校の優等生として優秀者を推薦し、その印として協会に推薦し、その印として金の鍵が授与されました。